

'I Don't See Any Way of Winning'

大統領は悪夢を見ていた

ベトナム戦争の勝利を確信していたとされるジョンソン米大統領
だが録音テープに刻まれていたものは？

マイケル・ベシュロス（歴史家）

アメリカ大統領がテロリストに宣戦を布告した今、私たちは歴史の歯車が再び大きく動きだすのを目撃している。これは、リンドン・B・ジョンソン大統領（LBJ）がアメリカをベトナム戦争の泥沼に引きずり込んだ1965年以来の大きな戦争である。

去る10月、ジョージ・W・ブッシュ大統領は「私たちはベトナムからいくつかの重要な教訓を学んだ」と語っている。地上軍や軍事顧問の投入をめぐる議論、地上戦での敵の執拗な抵抗、先の読めない未来。今回の事態にベトナム戦争と重なるところがあるのは事実だ。

しかし今のところ国民の大半は、テロ撲滅のためには避けられない戦争として、この戦いを断固として支持している。一方、65年当時の私たちはベトナムについてほとんど知らず、その後10年にわたる戦争で5万8000人が死に、アメリカが史上初の敗戦を味わうとは思ってもいなかった。

今日まで私たちは、ジョンソンは勝利を確信していたと聞かされてきた。実際、彼は大規模な地上軍を投入した65年8月、ワシントンで「アメリカは自ら始めた戦争には必ず勝利する。一点の誤りもない！」と豪語している。

だが、胸の底には別の思いがあったようだ。私たちは今、ジョンソンの時代に隠されていた悲しい秘密に触れることになった。北爆開始から地上軍投入へとエスカレートしていく数カ月、ジョンソンは身近な人たちに、アメリカもベトナムでは絶対に勝てないと言い続けていたのだ。

ジョンソンの秘密は、64年から65年にかけて、自らひそかにホワイトハウス内にセットした録音装置で吹き込んだ何千本ものテープで明かされている。私はジョンソン大統領記念図書館が公開したテープを丹念に聴き、書き起こして解説を加え、1冊の本にまとめた。

それが『リーチング・フォー・グローリー』である。レディー・バード・ジョンソン大統領夫人が毎日

吹き込んだテープもあり、内助の功で知られた夫人が大統領の心理状態に胸を痛めていたことがわかる。

これらのテープのどこからも、ベトナム戦争勝利の自信に満ちた言葉は聞こえてこない。当時9歳の私がテレビで見た堂々たるジョンソンとは違う。膨大な数のテープから聞こえてくるのは、心理的に追い詰められ、恐怖におののき、怒りと猜疑心にとらわれた男の心の声だ。

真夜中に発した独り言

ジョンソンは何度も周囲の人間に対し、「気分が落ち込み」、戦争が失敗に終わることを「死ぬほど恐れている」とこぼしている。テープの中のジョンソンは、自分の行為が自分自身と大統領職、国家を破滅させると知っていながら、それを続行するしかないことに打ちひしがれている男だ。

ジョンソンは、ベトナムから撤退すべきではないと考えていた。「侵入してきた暴漢に前庭を明け渡してしまったら、翌日には玄関に踏み込まれ、その翌日には自分のベッドで妻をレイプされることになる」と、ジョンソンはテープで語っている。

同時に、核兵器を使用して「第三次世界大戦」を引き起こさないかぎり、ベトナムのゲリラを打ち負かせないとも思っていた。

ジョンソンは夫人に、最も危険な自分の思いを打ち明けさえしている。「撤退もできないし、現在の兵力では勝つこともできない。いったい、どうすればいいんだ！……私は性格的に、最高司令官には向いていない」

夫人に対しては、こうも言っている。ベトナムで何かを決めるのは「墜落する飛行機に乗っているようなものだ。そのまま地上に突っ込むか、脱出するかのどちらかしかないが、私には脱出用のパラシュートがない」と。

一方で夫人は、愛する夫が「鎖につながれたような気分」で「憂鬱の霧」に包まれており、「彼の人格がむしばまれつつある」と感じていた。

65年2月26日、ジョンソンはロバート・マクナマラ国防長官に「ローリング・サンダー作戦」の開始を命じている。これで北ベトナムには第二次大戦でヨーロッパ全土に落とされた爆弾よりも多くの爆弾が投下されることになるのだが、ジョンソンの心は深く沈んでいた。

「ついに私たちは、ベトナム人への爆撃に踏み切った。大きなハードルを越えたわけだ。敗戦という最悪の事態は考えていないが、勝利の道も見えない」

この言葉を耳にしたとき、私は総毛立った。時間を巻き戻し、ジョンソンにすがって思いとどまるよう懇願したくなった。

その1週間後、ベトナムに海兵隊の大部隊を送り込むことを決意したジョンソンは、上院軍事委員会のリチャード・ラッセル委員長に、暗い調子で語っている。「人はどこかに光明が見えれば戦えるが、ベトナムでは何も見えない。わずかな光もない。これが今の私にとって最大の問題だ」

ジョンソンはかつて、公民権や選挙権、医療保険制度、教育といった分野での自分の努力が実り、いつかリンカーンやフランクリン・ルーズベルトと並び称されることを願っていた。しかし65年8月には、ベトナムがその夢をぶち壊すことに気づいていた。

夫人は、「傷心」の夫が鬱状態に陥った様子を語っている。側近のなかにも心配して、精神科医にアド

バイスを求めた者もいる。

夜明け前に起きたジョンソンは、大きな声で言う。「戦争にはまり込みたくないのに、どうしようもない。60万人の青年を招集して、故郷や家族から引き裂かなくてはならないんだ」

かたわらでは、夫人が恐怖を感じながら横たわっていた。「私に向かって言ったのではない。独り言だった。その言葉が一晩中、彼の頭の中で繰り返されていたのかと思うと、ぞっとする。彼が傷つけば私も血を流す。最悪のとき」

今年9月に議会で演説したブッシュ大統領は、私たちの最終的な勝利は「确实」だという自分の言葉を信じているようだった。

とはいえ、新たな戦争が展開されている現在、ジョンソンの録音テープは、今後も消えることのない重要な教訓を与えてくれるだろう。血の犠牲を求められたアメリカ人にとって最大の武器は、私人としても心の底から勝利への道を確認している大統領である、ということ。

65年2月11日。ジョンソンは北爆を検討中。夫人は不安をテープに吹き込んでいる。

*

夫人 空爆に関する電話が続く長い夜。どんなひどい結果を生むかは神のみぞ知るといった命令を、（夫は）出さなければならない。彼は「こんな命令をするには、私は感傷的すぎる」と言った。でも、そんな命令を平然と出せる人間であってほしくない。

65年2月15日。ジョンソンは慰めを見いだすために、同じように泥沼化した朝鮮戦争を始めたハリー・トルーマン元大統領に助言を求めた。

*

LBJ 困っているんです。

トルーマン どうしたんだ？

LBJ ベトナム人のことです。歴史書を読んで、あなたが（朝鮮半島で）味わった苦悩がよくわかりましたが、あなたは手際よく終結させている。私にも学ぶところがあると思いました。

トルーマン 君にはやるべきことがわかっている。立派にやれるはずだ。

LBJ ……やるべきことはわかっています。やられたら、やり返す。私は戦争を拡大しようとしているわけではないし……。

トルーマン やっつけるんだ！ チャンスを見つけたら、必ず奴らをたたきのめせ。それがいちばん効果的だ。

65年2月25日。ジョンソンは北ベトナムに初めてB57爆撃機を送り込んだ。高齢者を対象とした医療保険制度をはじめとする「偉大な社会」プログラム関連の法案を議会で通過させようとしていたジョンソンは、戦争拡大を知った国民の間に反戦感情が生まれることを恐れた。ディーン・ラスク国務長官に、こう語っている。

*

LBJ 焦って政策を変えたと思われたくない。テレビはどこも、戦争拡大だ、B57爆撃機の出撃は政策の変更だと言っている。

確かに、B57を送り込むのは初めてだ。しかし「トンキン湾決議」（64年8月にトンキン湾の米艦隊が攻撃された事件の後に議会通过した）によれば、相手の攻撃は防がなくてはならない。私は決して、政策を変更したわけではないんだ。

65年2月26日。北ベトナムの大攻勢が始まった。国防総省は、米軍の空軍基地を守るため、海兵隊を含む地上部隊を送るべきだとジョンソンに迫った。

地上部隊を送って北ベトナムのゲリラから攻撃を受ければ、アメリカはたちまち地上戦に引きずり込まれる。ジョンソンには、それがよくわかっていた。彼はマクナマラ国防長官に語っている。

*

LBJ 今や試合は第4クォーターに入って、78対0で負けているようなものだ。なんとかしなければいけない。

地上部隊を送るのは死ぬほど怖い。だが（空軍基地の）安全を確保できないせいで多くの爆撃機を失うのは、もっと恐ろしい。

65年3月6日。ジョンソンは、昔から父親のように信頼しているリチャード・ラッセル上院議員に心の内を打ち明けている。

彼は地上戦に引きずり込まれることを非常に恐れ、国民感情の悪化も心配していた。

*

LBJ ほかに方法はないと思う。でも、怖くてたまらない。みんな「海兵隊が上陸する。いよいよ殺し合いだ」と考えるだろう。

もちろん、ベトコンは海兵隊を白兵戦に引きずり込む。当たり前だ。奴らは逃げたりしない。われわれは地上戦に縛りつけられるだろう。

だが、ウェストモーランド（米軍司令官）や、テイラー（駐南ベトナム大使）が毎日やって来て、「ど

うか、海兵隊を送ってください」と言う。統合参謀本部もそう言う。マクナマラやラスクも「送れ」と言う。

ラッセル 大統領、こんなことになって、私も本当に恐ろしい。こうなってしまっただけでは、もう後戻りできないと思う。

LBJ 毎日、兵や飛行機を失う一方だ。状況は悪くなるばかりだ。

ラッセル 海兵隊は、敵ではないベトナム人も殺しまくるだろう。飛行機の周りに現れるものは何でもかまわず、撃ちまくるだろう。

LBJ 飛行機など、なんの役にも立たない。何もかも爆撃する？ ニューヨークみたいな都会なら、爆撃も意味があるだろうが。

空軍にはだまされたよ。空軍力で（戦争に勝てる）なんて望みは捨てたほうがいい。

ラッセル 先が見えないな。

LBJ 爆弾を落とせば落とすほど、多くの国を威嚇し、多くの人を怒らせることになる。

ラッセル ベトナム人の怒りもますます激しくなる。ベトナム人を助けるために介入したのに。こんな大変な問題を引き継いだ大統領もほかにはいないでしょうな。

LBJ 「引き継いだ」と言われるなら、まだいい。でも、私が「始めた」と言われるに決まっているんだ。

65年3月6日。ジョンソンは海兵隊派遣に国民がショックを受けることを恐れ、マクナマラ国防長官に相談している。

*

LBJ まったく嫌になる。「海兵隊出動」ということになると、国民の心理にどんなに悪い影響があるか。母親たちは「ああ、ついに！」と言うだろう。海兵隊に比べたら、B57なんか日曜学校くらい無害に思えるだろう。

「治安維持部隊」とかなんとか呼べないか？ 「MP（憲兵隊）」みたいに。

マクナマラ 無理です。そんなふうには言えません。MPとは全然違うし、マスコミもわかっています。かえって、ごまかしだと非難されるでしょう。

LBJ わかった。やるしかないだろう。（海兵隊の派遣については）私の答えはイエスだ。心の中ではノーだがね。命令はいつ出すんだ？

マクナマラ 今日遅くに発表して、なるべく朝刊に載らないようにしましょう。目立たないように発表します。それでも、マスコミは派手に取り上げるでしょうが。

LBJ (暗く笑って) そうだろうとも。

65年4月18日。大統領は眠れぬ夜を過ごしている。大統領夫人の録音。

*

夫人 ベトナムで作戦が開始される時は、必ず起こすようにとのこと。「犠牲者が出たら、必ず知らせてくれ」と言う。

ベトナムのことが、一瞬も頭を離れないようだ。もちろん私だって、考えないでくれとは言わない。たとえどんなにつらくても。

65年4月29日。孤独な大統領の心の中で、疑惑がふくらんでいく。学生の反戦運動は共産主義者が裏で糸を引いていると、ゲイル・マクギー上院議員に警告する。

*

LBJ 共産主義者は、使える手段は何でも使って、アメリカを分裂させようとしている。この(反戦)組織のメンバーは、母親がアメリカ共産党の幹部だ。フーバー(FBI長官)も大変だと言って、昨夜このファイルを持ってきた。

65年6月15日。大統領はバーチ・バイ上院議員に、米軍兵士の士気が低いと嘆いている。

*

LBJ (ベトコンは) われわれを消耗させるつもりだ。私だって、彼らのほうが長くもつと思う。

ベトコンは敵を待ち伏せするために、溝の中で、水も食料もなしに2日間じっとしてられる。ところが、アメリカ兵ときたら、20分もたたないうちに、タバコが欲しくて我慢できなくなるんだ!

65年6月10日。ベトナム駐留のウィリアム・ウェストモーランド司令官は大統領に、10万人の増派を要請した。ジョンソンは、自分でも戦争をコントロールできなくなったと感じていた。

*

LBJ このままどんどん拡大していくのではないだろうか。

マクナマラ ウェストモーランドは電報で、その次の展開まで説明していますが、これで最後だとは言っ

ていません。

LBJ わかっている奴は1人もいない。こめかみにピストルを突きつけられているようなものだ。こっちも、向こうのこめかみにピストルを突きつける以外ない。

どこまでやらなきゃいけないか、わかっているのか？

マクナマラ わかりません。

LBJ 統合参謀本部にもわかっているのかどうか。わかっている人間がいるのかどうか。

4人殺されるのもひどいことだが、もし1000人やられたら、ものすごい人数の大部隊を送り込まなければいけなくなる。

マクナマラ そうなるでしょう。ベトコンが兵力を増強しているので、こっちも対抗上、兵力を増強せざるをえないと説明することはできます。

LBJ 「増強せざるをえない」と言うより、「防御に最善を尽くさなければならない」と言ったほうがいいだろう。

兵力を増強すれば勝てるとは言えないが、しなかったら、これまでに得た陣地を失うことになる、と説明しよう。これは現状維持のために必要な作戦なんだ。

今さら、5万人投入すれば勝てる、10万人、15万人投入すれば戦争を終わらせられると考えている人間はいないだろう。

マクナマラ そのとおりです。

LBJ それでも、アメリカは撤退しない。

ベトコンは溝で2日間じっとして
いられるが、アメリカ兵は20分も
するとタバコが欲しくなるんだ！

リンドン・ジョンソン（1965年6月15日）

夫は「憂鬱の霧」に包まれている
いま彼の人格がむしばまれつつある
ジョンソン夫人（1965年3月13日）

Reaching for Glory

『リーチング・フォー・グローリー』

By Michael Beschloss

Simon & Schuster

480 pp. \$30.00

マイケル・ベシュロス編

